



No.3

2022年3月31日

Newsletter

日本遺伝性腫瘍学会 / The Japanese Society for Hereditary Tumors

目次

開催報告

第24回遺伝性腫瘍セミナー開催報告	n1
理事会・評議員会開催報告	n3

お知らせ

第28回日本遺伝性腫瘍学会学術集会	n3
第25回遺伝性腫瘍セミナー(速報)	n3
編集後記	n3

開催報告

◆第24回遺伝性腫瘍セミナー開催報告

第24回遺伝性腫瘍セミナーを終えて

プログラム委員長 中島 健

京都大学大学院 医学研究科

社会健康医学専攻 医療倫理学・遺伝医療学

このたび、惜越ながら香川大学の隈元謙介先生と共同でプログラム委員長を担当させていただきました。この場を借りて、私は近年の本セミナーについての事情を会員の皆様と共有させていただきたいと思います。

1. テーマ設定とスケジュール

本セミナーは最近では、①HBOC関係、②遺伝性消化管腫瘍、③その他の遺伝性腫瘍のメインテーマが3年で一巡する形式で実施しております。年明けに次年度のテーマ、プログラム委員長(実行委員長)、プログラムの設定後、講師への依頼を始めます。同時進行で講義会場、ロールプレイ(RP)実施会場を決定します。

2. オンサイト開催での会場確保

2019年までの課題として、①セミナー受講希望者の増加、②オンサイト開催での講義会場の確保、③RP会場の確保、がありました。都心の民間会場は数年前から予約で埋まり、病院・大学等も三日間の予約確保は困難な状態でした。また、RPのための小部屋を民間施設で多数確保することはほぼ無理でした。2019年にはがん研有明病院の診察室で準備をしましたが、運営方法に限界を感じておりました。

3. オンライン開催に関して

そのような状況で、2020年はコロナ禍によりオンラインでの開催を余儀なくされました。2021年開催の今回は、セミナー事務局(トータルマップ、飛松様)のご尽力により無事実施できました。オンライン開催では、講演ビデオの事前チェックに大変な労力が必要となりますが、この点に関しましては、セミナー委員会委員長の吉田輝彦先生、田辺記子先生にご尽力いただきました。RPは一コマ90分と制限された状況で、物足りない印象の参加者も多かったかと思えます。

オンライン開催にはもちろん欠点もありますが、会場確保の心配がないという利点は大きく、少なくともRPにおいては今後も継続されるかと思えます。セミナーの運営の事情にご理解いただき、今後のご支援・ご参加をお願いする次第です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。奇譚のないご意見もお待ちしております。

第24回遺伝性腫瘍セミナーを終えて

プログラム委員長 隈元 謙介

香川大学医学部 消化器外科

このたび第24回遺伝性腫瘍セミナーのプログラム委員長を中島健先生と一緒に務めさせていただき、光栄に存じます。新型コロナウイルスのパンデミック状態の遷延に伴い前回に引き続きWeb開催となってしまいましたが、モニターを通して多くの方々に受講していただき、誠にありがとうございました。受講していただいた皆様には、この場を借りて感謝申し上げます。今回のテーマは「遺伝性消化器がん(FAP、リンチ症候群を中心に)」であり、遺伝性大腸癌診療ガイドラインを実装した内容になりました。昨今の遺伝子解析の発展に伴う遺伝医療への関心の高まりのなかで、この分野は従来から診療ガイドラインが作成され、医療者に啓発されてきました。以前にも同様のテーマでセミナーが実施されたこともあり、ともすればマンネリ化してしまうなかで、多職種に向けた幅広いニーズに対応可能なプログラムを組むことの難しさを痛感しました。

遺伝診療も分業化されてきており、遺伝性腫瘍の知識だけでなく、クライアントを前にしたときにどのような対応をすれば安心して理解してもらえるのか、それぞれの診療における立場で活用できる何かを得ることができましたなら本望です。これまでは遺伝に興味のある人たちが集まり、同じスタートラインで勉強して座学とロールプレイの実習をしてきたと思います。しかし、遺伝子診断の日常化がこの領域に大きな改革をもたらし、これまであまり関心がなかった初学者の方にも受講していただけるようになりました。こうしたセミナーを通じて遺伝性腫瘍をさまざまな角度からとらえて理解できることは、たとえ診療はクールでも、遺伝に関してはとても楽しく学べるようになると思います。

遺伝性腫瘍はがんになりやすい体質を有しているということですから、適切な診断とサーベイランス、そして心理的・社会的支援を行うことで、早期発見・早期治療で生命予後のリスクは有意に低下させることができます。ただ、クライアントが知りたいことと知りたくないことなどがあり、多様なニーズに対応する必要があることも忘れてはいけません。「持続可能」や「多様性」は現代のキーワードでもあります。このセミナーも初学者から専門医に至る幅広い受講者の各々のニーズに対応していくことで、これからも持続的な遺伝医療を担う人材を育成していけるものと考えられる良い機会となりました。

参加者の声

Webでのロールプレイに参加して感じたこと

田中 圭紀

香川大学

遺伝性腫瘍セミナーのロールプレイにはこれまで何度か参加したことがあり、毎回多くのことを学べる貴重な機会だと思っています。とくに、自分で行ったシーンの中から学べること以上に、ほかの参加者の方のロールプレイから得られるものが重要だと感じていました。

今回は看護師の方と遺伝カウンセラーの方と同じグループになりました。看護師の方のクライアントへの温かい心遣いや柔らかい話し方、遺伝カウンセラーの方のとても自然なアイスブレイクや「遺伝」という概念の明快な説明方法など、その職種ならではの特色がカウンセリングに表れていて、今後ぜひ取り入れたいエッセンスが盛り沢山でした。また、今回は初めてのWeb参加だったのですが、画面越しということもあってほどよく緊張が取れた状態で臨むことができました。人数もいつもより少なく、質問がしやすい雰囲気だったのはとても良かったと思います。

ただ、やはり画面を通してのやり取りは、視線の応酬や相槌など、ノンバーバルコミュニケーションが手薄い印象がありました。一方で、今後、地方のクライアントが遠方の施設でのカウンセリングを受けたり、遠方に住む血縁者がカウンセリングに同席する場合にWeb診療が利用される機会も増えてくる可能性があります。Webでのロールプレイを経験しておくことは、そういった場面で役に立つのではないのでしょうか。

遺伝性腫瘍セミナーに参加して

権田 憲士

大道中央病院

今回ご担当いただきました国立がん研究センター中央病院的田辺先生には、ファシリテータの労をお執りいただきご感謝申し上げます。私の居住地である沖縄県は全国に比して新型コロナウイルス感染症の感染率が高かったため移動が憚られました。オンライン形式での開催となり、また拙い個人病院からのセミナー参加の許可をいただきまして、誠にありがとうございました。小生にとりましては、今回のリンチ症候群のテーマは満足度が高かったです。と申しますのも、当県では男性の大腸癌の罹患率が高く、前立腺癌、乳癌の増加がみられています。最新の2021年NCCN Guidelinesをご提示いただきましたが、4つ全ての遺伝子別発症リスクが最大10%である関連腫瘍が大腸癌、子宮内膜癌、前立腺癌と乳癌でございました。野水整先生にご教示いただき新規遺伝子変異を検出できましたTurcot症候群(MLH1 exon2 donor site GT del.)、Lynch症候群[Henry T. Lynch先生が逝去された年に論文(2019,BMC Med.Genetics)で小生が発表したN家系MLH1 exons 4-19 del.]とも関連していたからでございます。

講義では宮古島の方のゲノム解析がなされており、小生の地域密着型病院では、濃厚ながん家族歴を認める離島の患者さんにお会いすることが多いため、離島居住のご家族へのカウンセリングのコミュニケーションツールとしてオンライン活用の利点や欠点の追求の機会をいただきました。大変にわかりやすいロールプレイの検討症例をオーガナイズしていただいたセミナー委員のみなさま方に心よりお礼を申し上げます。

第24回遺伝性腫瘍セミナーに参加して ～ロールプレイデビュー戦～

阿部 明子

広島大学大学院医系科学研究科 遺伝カウンセラー養成コース M1

今回初めて遺伝性腫瘍セミナーに参加させていただきました。遺伝カウンセラー養成コースに入学する前は、看護師・助産師として遺伝カウンセリングに同席し、クライアントの看護に携わっていましたが、今回は学生として、遺伝性腫瘍の知識向上と遺伝カウンセリング技術の習得のため本セミナーに参加しました。

ロールプレイ(RP)は私にとって初めての経験であり、グループメンバーが臨床遺伝やがん薬物療法の第一線で活躍されている先生方でしたので、とても緊張しました。これまで養成コースの陪席でも、検査の詳細やサーベイランスの情報提供、結果開示は臨床遺伝専門医が担当されていましたので、遺伝カウンセリングを主体的に行うことの難しさを痛感しました。至らない点が多々あったと思いますが、RPに参加することで多くのことを学び、今後の課題が明確になったと感じています。RP後のフィードバックでは、先生方やファシリテータの金子先生から、非常に丁寧にポジティブなご助言をいただきました。お陰様でRPデビュー戦ではありましたが、苦手意識をもつことなく次なる挑戦に向かえる経験をさせていただけただけに感謝の思いでいっぱいです。最後になりましたが、このような実り多いセミナーを企画し、参加の機会を与えてくださった関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

遺伝性腫瘍セミナーに参加して

加藤 美美乃

岡山大学病院 臨床遺伝子診療科

今回は遺伝性消化器癌をテーマにした講義・ロールプレイであり、知識の再確認やアップデートに活かせるよい機会となったと思います。

また、オンラインでの開催となりましたが、Zoomでのロールプレイは遺伝カウンセリング担当者役でもクライアント役でも両者にそれぞれの難しさを感じました。オンライン形式では慣れない状況も多く、とくに画面上のクライアントの表情や様子の読み取りづらさ、話の間の取り方の難しさなどの課題を感じましたが、グループ内で十分にディスカッションすることでオンラインでの課題や工夫するポイントを再確認できました。実際のクライアントとのオンライン診療前にロールプレイを経験し、課題や工夫点を整理することができたのはとくに良かった点だと思います。また、リンチ症候群のリスク評価についても解説いただき、理解を深めることができました。少人数の班構成であったこともあり、各施設間での遺伝診療の情報交換なども密に行うことができ、有意義な時間となったように思います。

セミナーへの参加で自身の遺伝カウンセリングの技術や態度を振り返り、日常の診療や今後増加が予想されるオンライン診療の糧としたいと思います。本セミナーを開催いただいた先生方、スタッフの皆様、同じ班でロールプレイに参加いただいた皆様に感謝申し上げます。

遺伝性腫瘍セミナーのファシリテーターとして

古川 孝広

がん研有明病院 先端医療開発センター

これまでの遺伝性腫瘍セミナーでは、参加者としてカウンセリング実施のときに注意すべき点を学び、ファシリテーターと一緒にロールプレイを実施した参加者から日常の診療に役立つアドバイスをいただけてきましたが、今回のセミナーでは、初めてファシリテーターとして参加することになり、カウンセリングのエキスパートである先生方のようなサポートができるか、不

安が強かったことを思い出します。もちろん事前の準備は行いましたが、当日は緊張していました。参加者はさまざまなシチュエーションでのロールプレイを実施するのに慣れており、Zoomでのコミュニケーションも非常に円滑に実施できました。参加者に助けられたのはもちろんですが、皆さんに少しでも学びになるように、私も1つずつ丁寧にコメントするように努めました。Zoomは便利ではありますが、私としては、やはりロールプレイは対面での実施のほうが好きですね。次回以降、どのようなスタイルでのロールプレイの実施になるかはわかりませんが、また参加してみたいと思っています。

❖理事会・評議員会開催報告

2021年度理事会および2021年度評議員会（社員総会）の開催状況および議事録については、右記Webページに掲載されております。

.....
https://jsht-info.jp/medical_personnel/outline/minutes/

お知らせ

第28回日本遺伝性腫瘍学会学術集会

- テーマ：遺伝性腫瘍のルネサンス－追い続ける夢－
- 会期：2022年6月17日（金）～18日（土）
- 会長：藤原 俊義 先生
 (岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器外科学)
 田中屋 宏爾 先生 (岩国医療センター外科)
- 会場：岡山コンベンションセンター
 (〒700-0024 岡山県岡山市北区駅元町14番1号
 JR岡山駅より徒歩3分)

(速報) 第25回遺伝性腫瘍セミナー

- セミナーテーマとプログラム委員長に関しまして、速報としてご案内いたします。開催概要・日程については、今後決定予定です。詳細情報は学会ホームページでご確認ください。
- テーマ：遺伝性内分泌腫瘍（仮題）
- プログラム委員長：櫻井 晃洋 先生
 (札幌医科大学医学部遺伝医学)
 内野 真也 先生 (野口病院)

編集後記

学会やセミナー等で直接お目にかかる機会が減っている現在、“オンライン”の診療やミーティング、セミナー等が普及して便利になりつつあるとともに、face to faceのありがたみも一層増しているように感じます。新年度を迎えるにあたり、ツールの便

利さを享受しつつも、最新情報の習得と活発なディスカッション、温かみの伝わるコミュニケーションができるよう心がけていきたいと思っています。

(広報委員会：金子景香、田辺記子)